

## 序 文

本論集は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下、AA研）が実施した共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」の成果論集である<sup>1</sup>。

本課題は、2016年度から2017年度までの2年間、AA研所員4人、所外研究者15人、計19人のメンバーで、都合5回の研究会をおこなった。課題の代表者・副代表者を、渡辺己・澤田英夫（ともにAA研）がそれぞれ務めた。

ここで、そもそも何故、現筆者・渡辺己が本課題を立ち上げるに至ったか、個人的な経験談になるが、述べておきたいと思う。

まず、筆者は北アメリカ先住民諸語を専門とし、なかでも北西海岸に分布するセイリッシュ語族、特にその中のスライアモン語<sup>2</sup>を調査研究してきた。筆者が調査研究を始めた1990年には、この言語は先行研究がごく限られたものしかなく、必然的に現地調査をおこない、話者から聞き取り調査をし、音素を立て、文法を解き明かしていくことがやるべきことであった。筆者の博士論文（2000年、京都大学）は同言語で複雑な様相を見せる形態論を記述したものであり、それに統語論の概略を加筆修正を施したWatanabe (2003)は、同言語のもっとも大部な文法書である。そのような研究をしてきたこともあり、記述が十分にされていない一言語の文法全体をどのようにひとつの文法書にまとめるかということが、筆者の大きな関心のひとつになっている。

さらに筆者は2014年の日本言語学会夏期講座（名古屋大学）で「形態論」の講師を担当した。その際に教材として30頁のテキストを執筆することが課され、世界の言語に見られる形態法の多様性を伝えるために、さまざまな言語の文法書にあたった。

ところが、執筆を始め、ある言語現象について具体例をさまざまな言語から引いて示そうと文法書を調べ始めると、予想をはるかに超えて作業が難航した。特に形態法について、かなり多くの文法書にあたって調べた。それは例えば重複法であったり、接中辞、あるいは超分節素が形態法的に意味機能を担う例についてであったりした。実際に個別の文法書にあたってみると、思っていたより使いにくい、あるいは分かりにくい文法書が多いことに気がついた。そもそも、ある形態的現象について、自分の専門の言語・語族以外で、それを持つ語族・地域を知っていても、どの文法書を見れば分かりやすい例が見つかるかが分からなかった。

短い文法書の方が当然、情報が見つけやすいが、それは情報が少ないことも意味し、探している現象についての例がない場合がある。あるいは載っていても1例のみしかない場合もあった。

渡辺己. 2022. 「序文」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 1-5.

DOI: <https://doi.org/10.15026/116955>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

<sup>1</sup> 本論集は、編者および一部の執筆者による内部査読のうえ、匿名査読者2名による査読を受けた。査読者にはお礼を申し上げたい。

<sup>2</sup> この言語をどう呼ぶかは問題があるが、本稿ではスライアモン語という名称を使う。詳しくはWatanabe, Honoré. 2003. *A morphological description of Sliammon, Mainland Comox Salish, with a sketch of syntax*, Endangered Languages of the Pacific Rim Publication Series, A2-040, Suita (Osaka): Osaka Gakuin University. pp.2-3 参照。

逆に、大部で網羅的な文法書だと、求めている情報や具体例がどこに載っているか大変探しにくい場合があった。あるいは、例が載っているが、その形態素分析（ハイフンによる分節）やグロスが施されていないために、その言語や語族の専門家以外には分からない文法書もあった。刊行年が古く（タイプライターで打ったものや、ガリ版刷りのようなものなど）、掲載されている情報がどれほど信頼できるものか分からない場合もあった。

調べている言語現象をテーマとして扱った研究書や論文が見つかったこともあり、それらは有益な場合もあったが、結局そこに載っている言語データがその筆者の一次資料ではなく、他の文献から引用されている場合は、やはり原典にあたる必要があり、それは参照文法書であることが多かった。そしてその文法書にあたってみると、すでに述べてきたような問題があったり、中には原典から間違っただけで引用している場合もあった。

このような作業を通して、筆者は参照文法書について改めて考えさせられた。端的に言えば、「理想の参照文法書」とはどのようなものか、それはどのような要件を満たしているべきなのか、そしてそのような理想の参照文法書を書くにはどうしたら良いか、ということである。

記述的な態度を持ち、細分化された言語の一部の現象ではなく、言語全体の記述をおこなおうと研究している者であれば、誰も同じような思いを持ち、考え、悩みながら対象言語に取り組んでいるはずであろう。言語の研究は、対象言語の一側面、個別の言語現象だけを扱うのはごまかしが効くという点で「簡単」だと言えるかもしれない。その現象だけきれいに分析し説明ができたとしても、問題はその分析がその言語全体の分析・説明の中でも成立するかどうかである。一言語の文法全体を書こうとすると、それまでの分析はほころびを見せるようになる。ある部分をきれいに分析できたと喜んでいても、文法の違う部分を分析しようとした時、きれいに見えた分析ではどうにも当てはまらなくなり、最初に戻って分析をやり直さなければならなくなることは、文法全体の記述に挑んだ者であれば、全員が経験しているはずである。

本課題を企画するにあたり、何名かの研究者に相談してみたところ、言語の文法全体を捉えようともがいているひとは、参照文法書について、筆者と同じような強い関心と大きな悩みを抱えていることが分かった。そして、さまざまな言語・語族、そして地域で記述研究に従事する研究者を集め、それぞれが研究している言語・語族の参照文法書を解説しつつ、そこから、一言語の文法全体を記述しようとする時にどのような問題があるか、参加者の間に共有し、討議することを目的として本課題を立ち上げることができた。筆者と同じように、先行研究が少ない、あるいはまったくない言語を対象とし、現地調査で自ら一時資料を収集し、それを基に参照文法書をまとめようとしているものが多くなったが、その一方で、日本語、中国語、朝鮮語・韓国語のような研究の歴史が長く、参照文法書がすでにいくつも刊行されている言語の研究者にも参加してもらうことで、対象とする言語・語族と参照文法書が多様になった。本論集は、5回の研究会を通しておこなわれた発表と議論の一部をまとめたものである。本課題の参加者は、議論を通してそれぞれに得るところがあったと思うが、共通して感じたこととしては、我々のすべき文法記述の仕事は、まだまだやるべきこと、取り組むべき言語が山のようにあるということである。

本課題の参加メンバーは以下の通りである。(所属は当時のもの。)

氏名	所属機関所属部局	研究会等での役割
渡辺己	東京外国語大学 AA 研	セイリッシュ語族
加藤重広	北海道大学大学院文学研究科	日本語
黒木邦彦	神戸松蔭女子学院大学文学部	日本語方言
下地理則	九州大学大学院人文科学研究科	南琉球語
新永悠人	成城大学	北琉球語
山越康裕	東京外国語大学 AA 研	モンゴル諸語
児倉徳和	東京外国語大学 AA 研	ツングース語族
川澄哲也	福岡大学言語教育研究センター	中国語
千田俊太郎	京都大学大学院文学研究科	パプア諸語, 朝鮮語
長屋尚典	東京外国語大学総合国際学研究院	オーストロネシア諸語
林範彦	神戸市外国語大学外国語学部	チベット・ビルマ諸語
澤田英夫	東京外国語大学 AA 研	ビルマ諸語
松本亮	京都外国語大学	ウラル語族
吉岡乾	国立民族学博物館民族社会研究部	ブルシャスキー語および北パキスタン 諸言語
仲尾周一郎	京都大学大学院アジア・アフリカ地域 研究研究科	アフロ・アジア語族
米田信子	大阪大学大学院言語文化研究所	バントゥ諸語
阿部優子	東京外国語大学 AA 研	バントゥ諸語
牧野友香	大阪大学大学院言語文化研究科	バントゥ諸語
蝦名大助	神戸山手大学現代社会学部	ケチュア語族

(ほぼ日本から西回り順)

本課題の研究会は以下の日時, 発表者, 発表タイトルでおこなわれた。

### 2016 年度第 1 回研究会 (通算第 1 回目)

日時: 2016 年 7 月 24 日 (日) 10:00-15:00

場所: AA 研マルチメディアセミナー室 (306)

主催: 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

1. 渡辺己 (AA 研所員): 「趣旨説明と参照文法書について」
2. 山越康裕 (AA 研所員): 「モンゴル語族の文法書」
3. 児倉徳和 (AA 研所員): 「ツングース語族の文法書」

**2016 年度第 2 回研究会（通算第 2 回目）**

日時：2016 年 11 月 26 日（土）13:00-18:00, 2016 年 11 月 27 日（日）10:30-15:00

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

11 月 26 日

1. 黒木邦彦（AA 研共同研究員・神戸松蔭女子学院大学）：「日本語方言の文法書について：通時的観点から」
2. 加藤重広（AA 研共同研究員・北海道大学）：「日本語の文法書について」
3. 吉岡乾（AA 研共同研究員・国立民族学博物館）：「ブルシャスキー語の文法書について」
4. 全員：議論

11 月 27 日

1. 新永悠人（AA 研共同研究員・成城大学）：「日琉諸方言の文法書：研究史の整理」
2. 下地理則（AA 研共同研究員・九州大学）：「日琉諸方言の文法書：理論的・方法論的な問題点と今後の動向について」
3. 全員：議論と今後の予定について

**2016 年度第 3 回研究会（通算第 3 回目）「バントウの会」**

日時：2017 年 3 月 27 日（月）13:00-18:00

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

1. 渡辺己（AA 研所員）：「はじめに」
2. 米田信子（AA 研共同研究員・大阪大学）：「バントウ諸語の参照文法書—バントウ諸語研究における参照文法の位置づけを中心に—」
3. 阿部優子（AA 研共同研究員・AA 研特任研究員）：「タンガニイカ湖バントウ諸語の参照文法」
4. 牧野友香（AA 研共同研究員・大阪大学大学院生）：「ランバ語の文法書—動詞に関する問題を中心に」
5. 全員：全体討議および連絡事項等

**2017 年度第 1 回研究会（通算第 4 回目）「シナ・チベットの会」**

日時：2017 年 7 月 15 日（土）13:00-18:30

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

主催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

1. 渡辺己（AA 研所員）：「はじめに」

2. 川澄哲也 (AA 研共同研究員・松山大学) : 「中国語の参照文法書について」
3. 林範彦 (AA 研共同研究員・神戸市外国語大学) : 「中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」
4. Tun Aung Kyaw (AA 研特別招へい教授) : “Problems Arising from Compiling a New Reference Grammar of Modern Colloquial Burmese”
5. 澤田英夫 (AA 研所員) : 「インドおよび周辺地域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」
6. 全員 : 全体討議および連絡事項等

### 2017 年度第 2 回研究会 (通算第 5 回目)

日時 : 2018 年 3 月 6 日 (火) 10:30-18:00, 2018 年 3 月 7 日 (水) 10:30-15:00

場所 : AA 研マルチメディア会議室 (304)

主催 : 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

3 月 6 日

1. 仲尾周一郎 (AA 研共同研究員・大阪大学) : 「北東アフリカ非バントゥー系諸言語の文法」
2. 渡辺己 (AA 研所員) : 「セイリッシュ語の文法書について」
3. 蝦名大助 (AA 研共同研究員・神戸山手大学) : 「南米先住民諸語の文法書」
4. 千田俊太郎 (AA 研共同研究員・京都大学) : 「パプア諸語の文法書について」, 「朝鮮語の文法書について」
5. 全員 : 全体討議

3 月 7 日

1. 松本亮 (AA 研共同研究員・京都外国語大学) : 「ロシア内ウラル諸語の文法書」
2. 長屋尚典 (AA 研共同研究員・東京外国語大学) : 「西オーストロネシア諸語の文法書」
3. 全員 : 全体討議および連絡事項等

最後に、本課題に参加していただいた方々、そして本論集に寄稿して下さった執筆者の皆さんにあらためてお礼を申し上げたい。本論集の編集過程で、AA 研で刊行している学術誌『アジア・アフリカ言語文化研究』の「別冊」をシリーズとして新たに立ち上げることが決定され、そのシリーズで本論集を刊行することになった。そのため、「別冊」シリーズの投稿規程などが整備されるのを待つことになり、さらに 2020 年春頃から新型コロナウイルスによる世界的パンデミックが起り、その対応に追われるなどしているうちに、執筆者の皆さんには初稿の提出から刊行まで、ひどく長い時間をお待たせしてしまった。本課題の代表者としてお詫び申し上げたい。

渡辺己 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)